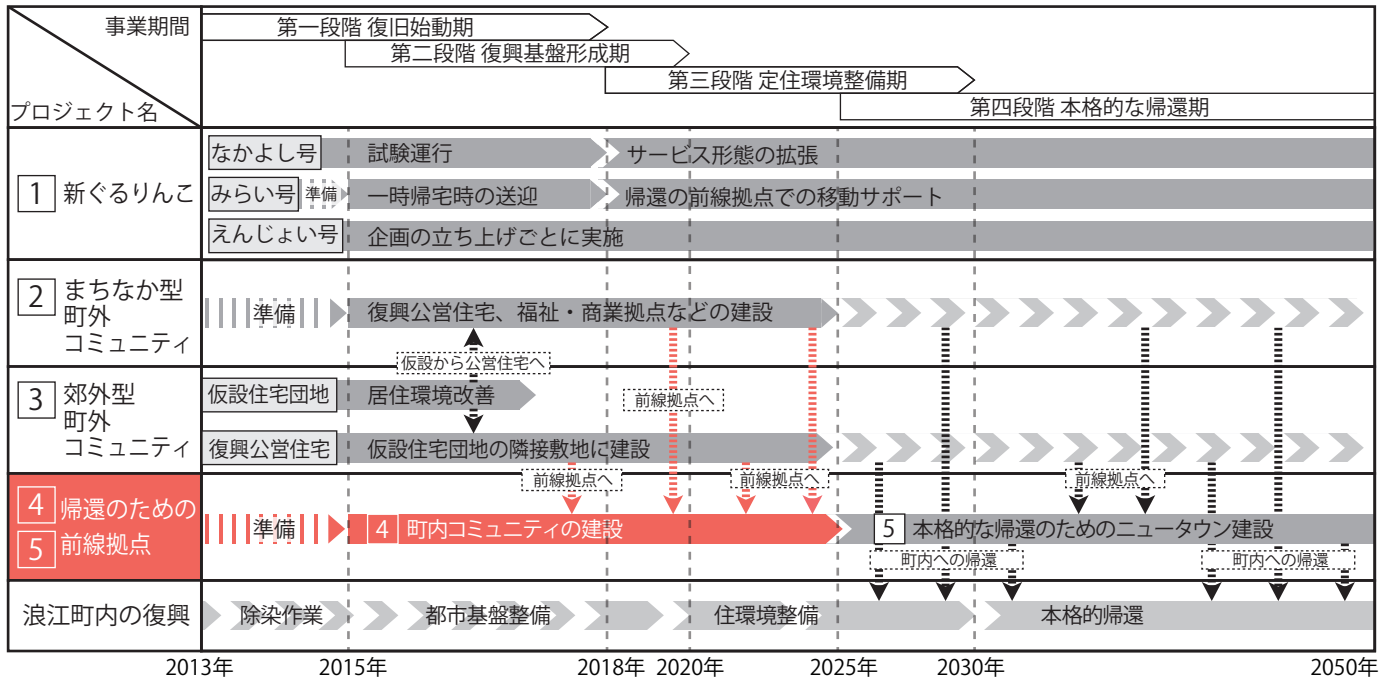
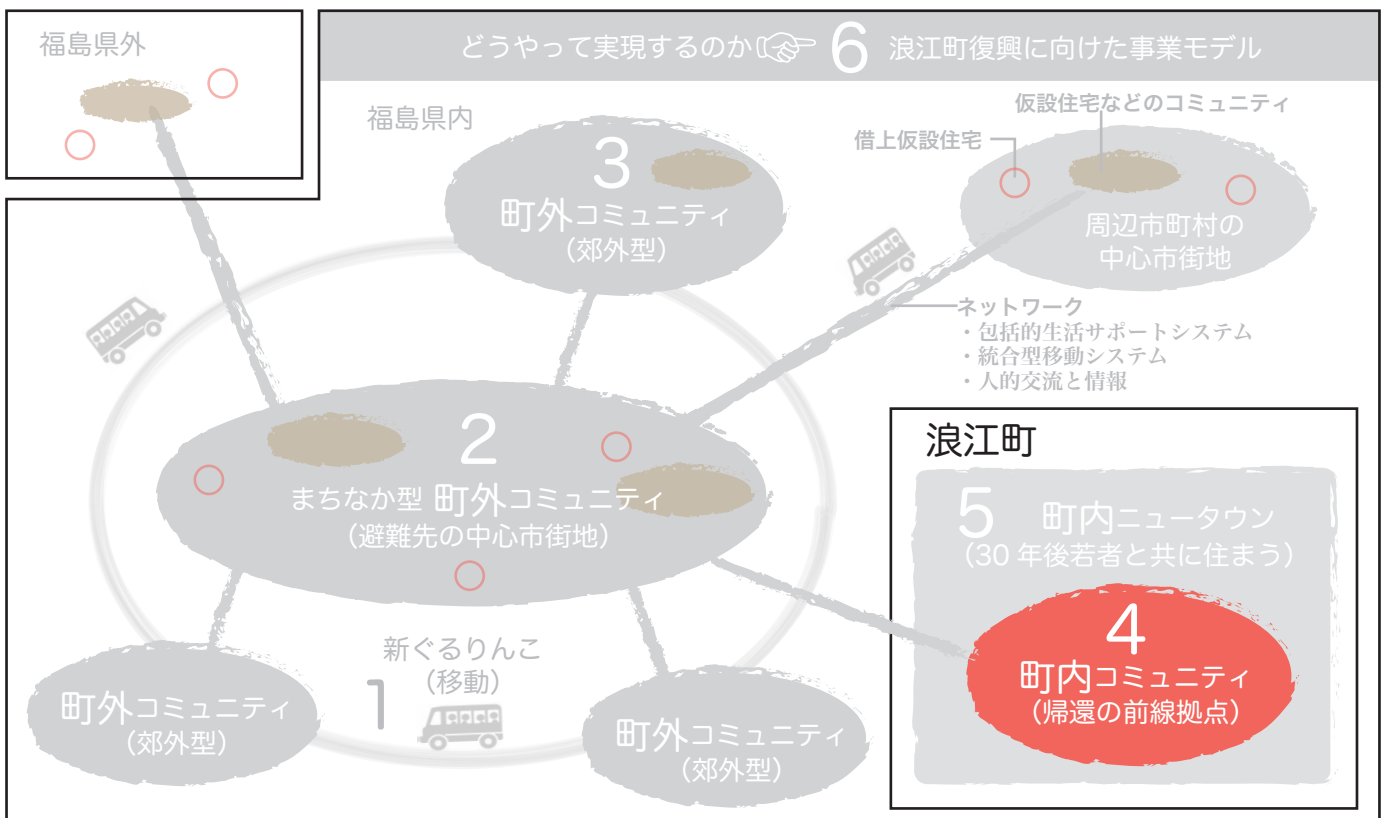


4. 浪江町への帰還の起点となる沿岸部の高台に形成する 前線拠点としての「町内コミュニティ」

浪江町内の空間線量の低いエリアでは、将来的には一時帰還が許可されることになるが、線量の低い浜側の津波による被害状況を考えると、すぐに元の自宅に戻って生活できるエリアは多くはないだろう。そのため、町内の比較的線量の低いエリアの高台で、自宅への帰還の準備を行う為の仮の生活の場、すなわち、浪江町への帰還の起点となる「町内コミュニティ」を建設する。



協働復興のプロセス：「町内コミュニティ」



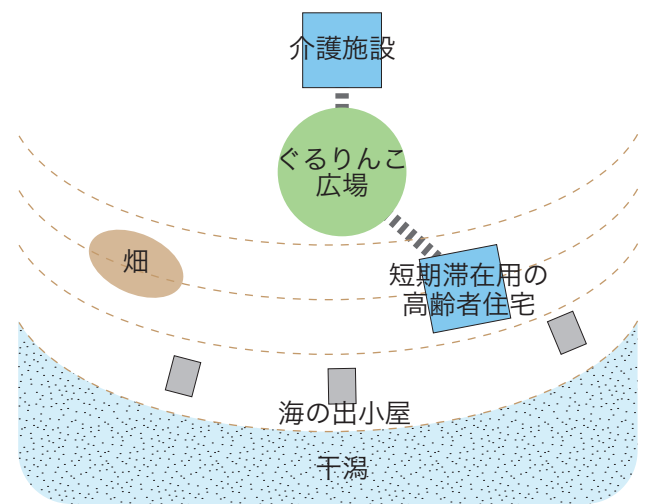
協働復興のための始動プロジェクト：「町内コミュニティ」

帰還のための前線拠点とは

一時帰還の許可により、自宅や店舗の手入れ、先祖の墓参り、農地の手入れや環境の維持を行うための拠点が必要となる。それと同時に、ふるさとで1日を過ごす為の日帰り用のレクリエーション機能と滞在施設が求められるし、数日間の滞在が可能になった後には宿泊施設も必要となる^{注1)}。さらに、上下水道や電気等のインフラ整備が進み、居住が可能になり、滞在が長くなるにしたがって町内コミュニティとしての環境を整えていくことになる。

初期段階にはぐるりんこ広場を中心に施設を整える

帰還準備のための町民の日帰り利用とともに、初期は元気な高齢者が短期滞在で利用することが予想され、高齢者に配慮した短期滞在施設と短期滞在者の移動・生活を支える「新ぐるりんこ」の広場が形成される。同時に、今後の福祉施設でサービスを提供する、介護・医療関係者と連携したサポート体制の整備が進む。

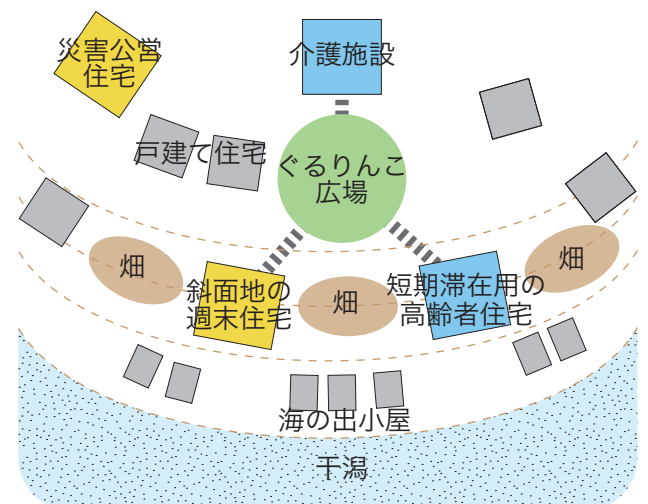


帰還の初期段階

本格帰還につながる多様な住宅や施設の整備

地元の福祉事業者が、高齢者へのケアに対応した多機能介護施設にグループホームやサービス付き高齢者住宅が併設された福祉拠点を整備すれば、ショートステイを含めた多様な暫定居住も可能になる^{注1)}。これによって、高齢者も安心して暮らせる環境が整えられると同時に、元気な高齢者等の働く場を生み出すことにつながる。また、商業については、移動販売等によって定期的な買い物ができる仕組みが整えられれば、町内コミュニティの生活の支えになる。

注1) 現在の避難指示解除準備区域では宿泊は許可されないが、安全性が確保されれば、高齢者を中心に、このような要求は大きくなり、対応が求められる。



施設の拡充

浪江町内の帰還拠点における福祉事業

放射線量の比較的低いエリアに、一時帰還のための福祉施設を整備する場合、浪江町の福祉 NPO や福祉事業者などが単独で事業を進めていくのではリスクが大きい。関係事業者が連携し、NPO や浪江町と連携して、復興交付金や出資金を活用しながら、町民のニーズに応じてモデルの実現を図っていく。

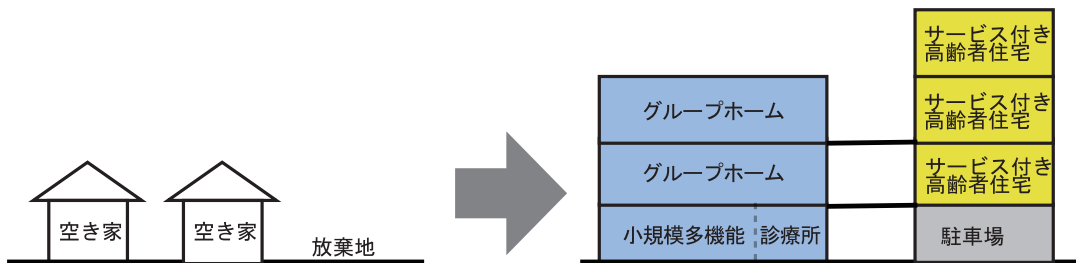
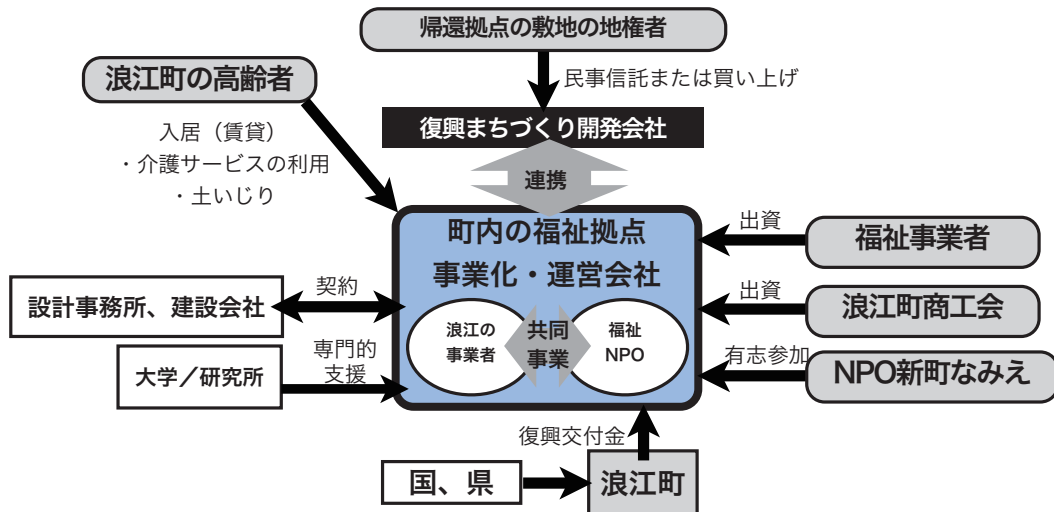
→②安心して暮らすための福祉拠点

事例 ゆいま〜る那須(栃木県那須町)



(73戸・敷地1000㎡)
高齢の単身者や夫婦だけでも安心かつ快適に住みやすいように、高齢者にふさわしいハードと、見守りなどのサービスが一体となって提供される、高齢者のために考慮された、サービス付き高齢者住宅。

事業のイメージ



浪江町内の比較的低放射線量の低い帰還拠点となりうる土地を民事信託によって、復興まちづくり開発会社が土地活用を行う。その際に、浪江の福祉 NPO 中心となって浪江の事業者と共同で設立したまちづくり会社が福祉事業を担う。

ぐるりんこの拠点を囲んで、交流施設や食堂、高齢者住宅などを整備し、いずれは定住のために必要な介護施設などの福祉サービスを提供できるコミュニティを形成する。

事例:サービス付き高齢者住宅「ゆいま～る那須」

約 70 世帯の集合住宅で自立型 40 世帯程度、介護型 30 世帯程度の住宅。中庭を囲む 5 つのユニットからなり木造 1,2 階建てとなっている。各住棟ユニットに共用室（食堂、音楽室、図書室など）を整備しており、コミュニティを育む共用施設となっている。



■医療・介護

●あい・デイサービスセンター那須

「あい・デイサービスセンター那須」では定員 15 名の介護サポートが受けられる。「ゆいま～る那須」の居室同様、八溝杉の無垢材を使用。暮らし慣れた敷地内で介護・介護予防のサービスを地用できることは暮らしの負担が少なく安心である。



■暮らし

●コミュニティキッチン「ゆいま～る食堂」

食堂棟にて地元の素材をできるだけ使った食事を提供する。あたたかい食卓をイメージした団らん空間となっている。



●コミュニティを育む共用棟

図書室や、音楽を楽しんだり談話したりと、余暇の楽しみや学び、地域の方々も含めた交流の場となっている。



音楽室



●移動販売

パン・生みたて卵・野菜・豆腐・ヨーグルト・など、地元の新鮮な食材などが届く。



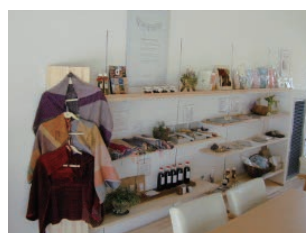
●送迎車「ゆいま～る号」

通院や買い物やちょっとした用足しにも便利な送迎車である。1日4回、週5日送迎を行っている。



●ショップ「ま～る」

入居者による手作り品や地元の生産者による味噌、醤油、織物製品などの販売を行っている。



●文化活動

音楽室・図書室・自由室といった共用スペースで書道、体操、ピアノ教室、コンサート、映画会、講演会、縫い物、ガーデニング、料理教室など多彩な文化活動が広がっている。

本格帰還の準備のための町内コミュニティ

放射線量も低く、津波被害も免れた幾世橋小学校から北棚塩周辺にかけての高台を例に、それぞれの自宅に帰還するための起点となり、またふるさとの帰還を願う高齢者の希望を実現する町内コミュニティのイメージを検討した。



①ふるさとの自然に親しむ場所



日帰りや一時帰宅で訪れた人が干潟のある自然公園で出小屋などを利用して散歩やサイクリングを楽しむ。

②安心して暮らすための福祉拠点



グループホーム、介護施設、食堂などが一体となった福祉拠点が整備されることで、高齢者も安心して暮らせる。

③元気な高齢者のための住宅



段々畑のあるサービス付き高齢者住宅で、土に親しみながら仲間と一緒に暮らせる。

④新ぐるりんこ・統合型移動システムの拠点と円形広場



移動販売車や移動図書館など多様な移動サービスが集まる。円形広場は住民の交流の場となる。

⑤多様な生活ができる斜面地の週末住宅



一時帰宅のための週末住宅を斜面地に建設。アトリエで作業したり、見晴らしの良いデッキで風景を楽しみながら生活できる。

⑥将来的に定住できる戸建て住宅と集合住宅



3戸で1つの庭を囲む定住戸建て住宅や、ある程度の規模の集合住宅などの復興公営住宅が高台や斜面地に整備される。